

※別紙

第2回 つなぐカフェ 多職種連携：グループワークでの参加者コメント

□A チーム

- ・歩行器で退院となったが、廊下が狭く方向転換が出来なかった。後ろに進む練習もしていなかったなので、移動に難渋したケースがあった。
- ・家屋調査無しで歩行器レベルでの退院となるケースもあるが、実際の日本家屋はフラットな環境ではなく、実際適応とならないケースが多い。
- ・入院中に使用していた病院備品と全く同じ物、同じ色などを希望する利用者も多く、探すのが大変なことも多い。
- ・歩行車のブレーキ操作に難渋し、覚えられない高齢者も多い。特にもともと健康な頃に市販のシルバーカーを使用していた方で多い傾向がある。
- ・退院後、一般的なデイサービスや施設でリハ職がいない状況で相談することができない。

□B チーム

- ・実際に病院内での使用していた歩行器や物品に関しては完全に同様なものがない場合は患者の受け入れ悪く、説得が大変です。
- ・リハ職に見てもらえて歩行補助具のアドバイス頂ければより安全な設定ができると思えました。

□C チーム

- ・脊髄小脳変性症に対するケースで、家族や本人がリハビリを希望しないなか、必要な補助具の選定に難渋したことがある。
- ・上記のようなケースの際、市の理学療法士に相談を依頼したが、もう少し検討における門戸が開かれていて気軽に相談できるような体制があると良いのではないと思う。
- ・歩行補助具の選定の際、リハ職に頼るよりも福祉用具業者にお願いすることが多かったが、専門知識をもつリハ職のスタッフに見てもらうことの重要性を認識できた
- ・歩行補助具の変更に対して、消極的なことが聞かれる。

□D チーム

- ・歩行補助具の変更は、利用者からの希望で調整することがある
- ・カタログを見せて能力的に良さそうなものを進めるも、デザイン性が良いものを希望することがある
- ・ケアマネよりも福祉用具専門員やリハ職の説明に納得することが多い
- ・知り合いの方が使っていることがきっかけで歩行補助具の変更を希望することがある
- ・お守り代わりに前に使っていた歩行補助具を残してほしいと要望されることがある
- ・家の中で這って歩く生活に移行した方を、元に戻した方がいいか悩むことがある
- ・骨折による入院リハ後、再転倒したケースで歩行補助具が固定型歩行器→I 本杖となるケースがいたが再転倒を考慮し、変更するのが不安を感じたことがある
- ・I 本杖歩行で退院するも寝たきり傾向で転倒しやすくなったケースにどの歩行補助具に検討すべきか

- ・大腿骨骨折リハ退院後、疼痛が続いてしまい、歩行補助具の検討で悩むケースがある

□E チーム

- ・本人から相談が無ければ、こちらから歩行補助具を提案することは無い。
- ・利用者の歩行がふらついているのを心配し、こちらから大丈夫か声がけしても「大丈夫です。」と話されて、それ以上話が進まなかった。本人が現状の歩行を変えることに消極的なことが多い。
- ・スリ足・前屈みの姿勢で一本杖にて何とか歩行されていた人が、最終的には転んでしまったことがある。
- ・家族や友人が善意で購入してきた歩行補助具を合う・合わないでは無く、「せっかくだから」と人間関係を理由に使い続ける人もいる。

□F チーム

- ・在宅リハを利用していない方で歩行補助具が明らかに合っていない方やお守りとして使用しないウォーカーを自宅にレンタルされている方がいるがどうしたらよいのか。補助具の変更の必要性を言っているものか。
- ・歩行補助具の使用方法が合っていないような時は指摘しても良いのか。
- ・福祉用具相談員の言葉をすべて信じて歩行補助具選定をしても良いのか。色々なものを進められるので。

□G チーム

- ・入院していればリハスタッフに聞くことができるが退院後にリハのサービスを使っていない利用者は変更せずそのままになってしまうことが多い。
- ・リハのサービスを使っていない場合は福祉用具の業者さんに相談することが多い。本人に合っていそうな歩行補助具を 2～3 点見繕っていただきデモ機として検討している。
- ・歩行補助具を勧めても「まだいいから」とかたくなに断られるのでそのままにしている。
- ・使用していない歩行補助具があり返却を提案しても「そのままでもいい」と言われてしまい返却しないケースもある。
- ・歩行が安定してきたので変更を促すが「このままでいい」と言われ変更できないケースがある。
- ・転倒のリスク、安全性を第一に考えてなかなか変更することができない。